

## I. 導入

メリークリスマス！街に買い物に出かけると、百貨店や大阪駅などあらゆる場所でクリスマスの飾りつけを目にします。街の至る所でクリスマスミュージックが聞こえてきたり、イルミネーションを楽しむ人を見かけたりすると、明るい気分になります。同時に、クリスマスの本当の意味を知らない人がたくさんいるという寂しさも感じます。この季節、立ち止まってクリスマスの本当の意味を考えるのは大切なことです。



まず**マタイ1:21**を読んでみましょう。御使いが夢でヨセフに現れ、マリアについてこう言いました。「**マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。**」クリスマスとは何でしょう。それは、イエスの来臨であり、イエスを信じるすべての人に無償で与えられる救いの賜物です。

聖書に親しみのない人は、この世を罪から救い出す権威や力をイエスがお持ちであることを不思議に思います。人間は、どれほど知恵や力があっても、それには限りがあります。この世のすべてを動かす権威のある人間はいません。ましてや、過去や未来まで意のままにできる人などいるはずがありません。また、人間は誰もが過ちを犯します。**ローマ3:10**はこう語ります。「**次のように書いてあるとおりです。『正しい者はいない。一人もいない。』**」自分自身が罪を犯すのを止めることもできない普通の人間に、人を罪から救うことなどもちろんできません。



しかし、イエスは普通の人間ではありません。イエスは主であり、神です。この世に救いをもたらすために来てくださったお方です。みことばは、神のみが私たちに救う力をお持ちだと明言します。イエスがお生まれになる700年前に、預言者イザヤは**イザヤ書43:10-11**にこのような言葉を残しました。「**43:10 わたしの証人はあなたたち／わたしが選んだわたしの僕だ、と主は言われる。あなたたちはわたしを知り、信じ／理解するであろう／わたしこそ主、わたしの前に神は造られず／わたしの後にも存在しないことを。 43:11 わたし、わたしが主である。わたしのほかに救い主はない。**」救い主は一人しかおられません。神もひとりしかおられません。それはイエスです。創造主なる神は、イエス・キリストという人の姿をとってこの世に来られ、私たちに救いを与えてくださいました。

これは、天地を創造する前から神がご計画くださったことです。**テモテ第二1:9b-10**で、パウロは言います。「この恵みは、永遠の昔にキリスト・イエスにおいてわたしたちのために与えられ、**1:10 今や、わたしたちの救い主キリスト・イエスの出現によって明らかにされたものです。キリストは死を滅ぼし、福音を通して不滅の命を現してくださいました。**」神のお約束の中で、恵みが私たちに与えられました。この世が創られる前に、キリストというかたちで与えられたので

す。

旧約聖書には、神のご計画が徐々に明らかにされていく様が記されています。最初に造られた人間アダムとエバが罪に陥ってまもなく、ある約束が与えられました。それは、救い主が来て、悪魔とそのすべての業を打ち砕くというものです。創世記3:15で神は仰せられます。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く。」新共同訳は「子孫」と訳していますが、原語のヘブル語を直訳すると、「女の種子」となります。生物学的に言うと、女性は卵子を持っており、種子つまり精子を持つのは男性です。この預言の意味するところは、歴史でたった一度だけ、女が男の精子なしに子を産むということです。処女が子を産み、その子が救い主となるというわけです。



聖書には、多くの預言が繰り返し語られています。この預言の場合、イザヤ書7:14で、処女が子を産むという預言が繰り返されています。「それゆえ、わたしの主が御自ら／あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み／その名をインマヌエルと呼ぶ。」ここで、新しい内容も登場します。救い主がインマヌエル（神がともにおられる）と呼ばれることです。

イザヤはこれについて、イザヤ書9:5で改めて語りました。「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれました。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君』と唱えられる。」これらすべては、イエス・キリストによって成就されました。嬉しいことに、イエスが治められるのは、この世における一時の治世ではなく、永遠の神の御国です。

預言者たちは、メシアなる救い主の来臨の時期に関しても明かしました。創世記49:10にはこうあります。「王笏はユダから離れず／統治の杖は足の間から離れない。ついにシロが来て、諸国の民は彼に従う。」この言葉は私たちにはあいまいで理解しにくいかもしれませんが、イエスがお生まれになった頃のユダヤ人たちにとってはそうではありませんでした。王笏は、王の権威の象徴であり、あらゆる裁きを告げる際に用いられました。中でも、生死に関わる裁きを宣告する際に使われました。ユダ族の歴史を見ると、いつの時代も自分たちの部族を治める指導者がいました。バビロン捕囚の時代でも、ユダ族の指導者がユダの人々の裁きをしました。しかし、ローマ帝国の時代になり、ユダ族からこの権威が剥奪されました。ちょうどその頃、真の王の王であるイエスがお生まれになりました。

ダニエル書9:25は、メシアがいつ来られるかについて語るもうひとつの預言です。「これを知り、目覚めよ。エルサレム復興と再建についての／御言葉が出されてから／油注がれた君の到来まで／七週あり、また、六十二週あって／危機のうちに広場と堀は再建される。」ここにある週は、7年を意味します。七週と六十二週を合計すると69週、すなわち483年となります。ユダヤ人がバビロン捕囚から戻ると、エルサレム再建が命じられました。そこから483年数えれば、メシアの来臨の時期がわかるというわけです。この預言は、人々がイエスを王、メシアと称える中、イエスがエルサレムに入られた日をきっちり予告しました(ヨハネ12:13)。しかし、イスラエルの指導者たちはこれを受け入れようとせず、ローマ帝国の



役人に、イエスを十字架にかけよう要求しました。

イエスが実際に十字架上で苦しみを受けられる数百年も前に、そのできごとは預言されていました。例えば、イザヤ書53:5は、救い主についてこう語ります。「彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」

預言者たちは、復活についてもあらかじめ語っていました。詩篇16:10にはこうあります。「あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく／あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず」イエスによって成就されたメシアに関する預言は他にもたくさんありますが、これだけでも、イエスが真のメシアであり、主なる神であることを証明する十分な証拠だと言えるでしょう。興味のある方は、教会書庫の貸出し本や、販売用の本で、こういった内容を取り上げたものがいろいろありますので、ご覧ください。



このような話題はクリスマスと無関係に思えるかもしれませんが、クリスマスの本当の意味を理解するためには、イエスがどのようなお方で、なぜ天から下ってこの世にお生まれになることを選ばれたのかを知る必要があります。ご降誕については、クリスマスイブの礼拝で詳しくお話する予定ですが、今日のところは、受胎告知の話を見ていきたいと思います。

当時、ローマ帝国の統治下にあったイスラエルの人々は、祖国を占拠するローマ兵の存在と重税に悩まされていました。人々は神に助けを求めました。ローマ帝国から解放してくれるメシアを求めたのです。しかし、神のご計画はさらに大なるものでした。全世界を罪と死から救うというのです。



2000年前も今も変わらず、ナザレの町の近くでは羊が放牧されています。ローマ帝国の支配下でも、日常生活は営まれ続けました。結婚、仕事、出産など、人生のあらゆる局面に対応しました。マリアという少女は、ヨセフとの結婚が決まっていました。当時、婚約は結婚と同等の重みがあり、婚約破棄は離婚のように見なされました。もちろん結婚するまでは、婚約者同士が一緒に住んだり寝たりすることはできませんでした。しかし、それを除けば、婚約は結婚とほぼ同じように考えられていました。



ある日、天使がマリアに現れて、マリアの人生は一変しました。カトリックの伝承によると、このできごとはマリアの実家で起こったといわれます。こうして、カトリック教徒はその場所に、受胎告知教会という美しい教会を建てました。一方、ギリシャ正教の伝承によると、ナザレの町の泉でマリアが水を汲んでいたところに天使が現れたといわれます。そこで、ギリシャ正教徒は、その場所に聖ガブリエル教会を建てました。



ガブリエルがマリアに現れた正確な場所については諸説ありますが、どの説もナザレであったことは支持しています。イエスがお生まれになった当時、ナザレは評判の良くない小さな町でした。にもかかわらず、神はナザレ出身の少女を幼子キリストの母としてお選びになりました。では、ルカ1:26-38から受胎告知の話を読みましょう。

## II. 聖書朗読 ルカ1:26-38 (新共同訳)

1:26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。1:27 ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。1:28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」1:29 マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。1:30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。1:31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。1:32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。1:33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」1:34 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」1:35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。1:36 あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。1:37 神にできないことは何一つない。」1:38 マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

### III. 教え#1

ノエルさんは、毎年クリスマスの絵を描いてくれます。これは、今年の作品で、受胎告知の場面を描いたものです。天使が現れる光景を想像できるでしょうか。突然天使が現れて、ずいぶん驚いたことでしょう。しかし、さらに驚くべきすばらしいことは、天地を造られた創造主なる神が、私たち一人ひとりに気をかけてくださることです。神は私たちを見守っておられます。喜びも悲しみも私たちとともに味わってくださいます。私たちと一緒に涙を流し、私たちと一緒に喜んでくださるお方です。神はマリアのこともずっと長い間見守っておられました。そして、ガブリエルを遣わし、神のご計画の特別な役割を果たすために選ばれたことを告げられました。



ガブリエルはマリアのところに来て挨拶し、怖がらなくてよいと言います。それからガブリエルは次のように続けます。(ルカ1:31-33より)「1:31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。1:32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。1:33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」マリアが、待ち望まれたメシアであるイエスの母となるというのです。このメシアは、神の御子で、永遠に続べ治めるお方です。その王国は神の御国であり、終わりはありません。



マリアは尋ねました。(ルカ1:34)「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」マリアの質問に、疑いは見られません。彼女は驚きましたが、ガブリエルの言ったことを信じました。ただ、どのように実現するのか不思議に思ったようです。マリアの質問は疑いからではなく信仰から出たものです。ガブリエルはこう答えました。(ルカ1:35)「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」

処女が子を産むことは奇跡ですが、それ以上に奇跡なのは、その子が神の御子であるという事実です。イエスは、永遠の神の御子です。人の姿を取ってこの世に来られ、私たちと苦しみ分かち合い、十字架上で私たちの罪を被ってくださいました。この奇跡について、ヨハネの福音書には次のように記されています。ヨハネ1:1-3「1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。1:2 この言は、初めに神と共にあった。1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」

ヨハネは、永遠の言が創造主なる神であると明言します。神は父、御子、聖霊の三位一体のお方ですから、言は神であり、神とともにあったのです。ヨハネ1:14ではこのようにも語ります。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

天使から知らせを受けたマリアは、エリザベトに会いに行きます。エリザベトを訪れた際のマリアの言葉をご覧ください。ルカ1:46-48「1:46 そこで、マリアは言った。1:47 『わたしの魂



は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。1:48 身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人でもわたしを幸いな者と言うでしょう、』」 マリアはまさに幸いな人です。2000年以上も、マリアは「幸いな乙女」と呼ばれてきました。これはマリアにふさわしい呼び名です。同時に、マリアは「わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」とも言っています。彼女は、自分に救い主が必要なことを分かっています。

そうです。私たちは皆、救い主を必要としています。マリアがナザレに帰った頃には、お腹が目立ち始めていたことでしょう。周囲からの非難を浴びたでしょうし、律法を破ったとして石打ちに遭う危険性もありました。それでも、マリアにはすべてを受け入れる覚悟がありました。主を信頼したからです。ルカ1:38aで、マリアは天使ガブリエルにこう答えました。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」なんと麗しい答えでしょう。フランチェスコ・アルバーニによる1645年の絵画には、幸いな信仰の女性マリアを神が天からご覧になる姿が描かれています。

#### IV. 結び

マリアは主を心から信頼し、主のおっしゃることはなんでもするという意志がありました。マリアは神の愛を知っていたのです。私たちはどうでしょう。私たちは神の愛を知っているでしょうか。神は、あらゆる方法でその愛を示してくださいますが、中でもイエスのうちに一番神の愛が表されています。とくに、イエスの生誕、死、そして復活が神の愛を物語ります。イエスは天の神の御座を離れ、この世に来てくださいました。最初のクリスマスにこの世に幼子として生まれてくださいました。この世では、イエスは十字架につながる長い孤独な道のりを歩まれました。そして、十字架上で私たちの罪のために死んでくださいました。これらすべてのことは、私たちのためになされたのです。それは、私たちが天で主とともに生きる永遠の命をいただくためです。そして三日後、イエスは死からよみがえられ、罪と死が打ち負かされたことを証明してくださいました。

今日のメッセージの締めくくりとして、ヨハネ第一4:9-16を読みましょう。

4:9 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。4:11 愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。4:12 いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってください、神の愛がわたしたちの内です。4:13 神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまることができることが分かります。4:14 わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見、またそのことを証しています。4:15 イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどまってください、その人も神の内にとどまります。4:16 わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じ

ています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。

クリスマスとは何でしょう。それは、イエス・キリストのうちに表された神の愛です。このクリスマス、私たち一人ひとりが神に心を開き、イエスを人生に迎え入れますように。また、私たちの家族や友人、隣人も同じようにしますように。マリアのように、神を信頼しましょう。神の救いのご計画を信じましょう。祈りましょう。

## V. 祈り